

障がい者旅行へ同行した学生のボランティア活動に関する一考察

津軽谷 恵 石川 隆志 高橋 恵一
石井 奈智子

要 旨

A県のデイサービス施設Bの作業療法士より、本講座へ、秋田県・青森県・岩手県への障がい者の旅行へ同行する学生のボランティア組織の要請があり、学生のボランティアを募集し、障がい者の旅行へ12名の学生が同行することとなった。この旅行は、学外の活動のため、講座としての支援は必要最低限とし、施設側との連絡調整は学生が直接行った。講座として行った学生への支援とボランティアに参加したことによる成果を検討する目的で、旅行終了後に学生へアンケートを行った。アンケートは、「参加する前の不安について」「事前の準備」「旅行に参加して経験や勉強できたこと」「困ったこと、戸惑ったこと」「旅行参加前後で変化したこと」「感想、大学への要望」「今後のボランティア参加について」の7項目について調査した。学生が障がい者の旅行へボランティアとして参加したことによる成果として、「充実感、達成感」「作業療法士としての関わり方」「人と人との関係構築の重要性」「早期からの積極的なボランティア参加についての要望」などがあげられた。

はじめに

A県の非営利活動法人（Incorporated nonprofit organization：NPO法人）Bデイサービス施設（以下、B施設）の作業療法士より、B施設利用者が秋田県・岩手県・青森県の旅行をする際に同行する学生ボランティアの組織について本学作業療法学講座へ協力依頼があった。そこで、本講座としては、このような依頼は初めてであったが、会議で検討した結果、貴重な体験ができる良い機会であり、今後の作業療法士になるための過程において学習する講義や臨床実習の参考になるのではないかとということで、学生にボランティア募集を呼びかけることにした。カリキュラム外の活動のため、学生への支援は必要最低限とし、B施設側との連絡調整は直接学生が行った。

旅行終了後に、学生に旅行ボランティアについてのアンケート調査を実施し、それらの結果から本講座としての学生への支援が妥当であったかどうかというこ

とと、学生が旅行ボランティアに参加したことによる成果を検討したので報告する。

ボランティア実施までの経緯

4月上旬にB施設の作業療法士より、8～9月予定のB施設利用者の旅行に同行する学生ボランティアの組織について本学作業療法講座に直接依頼があり、本学作業療法学専攻学生1～3年生にボランティア募集を呼びかけたところ、30名の学生が応募してきた。その後、3年生から代表者を2名選出してもらい、B施設スタッフと直接、連絡調整をするように伝えた。B施設側からは、旅行1ヶ月前頃に、性別が指定された12名のボランティア要請、現地で使用する車いす11台の借用とそれを運搬するレンタカーの手配と運転について要請があった。その要請を受けて学生から教員へ相談があり、本講座の支援として、車いすの借用先の紹介と、要請に対しては、学生として不安であること

やできることとできないことを遠慮なくはっきりとB施設側へ伝えるべきであることをフィードバックした。その後、車いすの借用は教員に紹介された所に学生が直接行き借りる手続きをし、車いすを運搬するレンタカーの手配についてはB施設側と話し合い、学生がレンタカーを借りる手続きをして、秋田空港まで学生が運転することとし、旅行中はB施設側で運転をすることとした。

旅行同行中の安全面の配慮として、学生ボランティア全員分のボランティア保険への加入手続きをB施設側が行った。また、金銭面での学生負担はレンタカーで車いすを運搬する学生以外は秋田空港までの移動料金のみであった。

．旅行について

1. 日 程

表1のように9/5(土)～8(火)までの3泊4日の予定で田沢湖、小岩井農場、八幡平、奥入瀬渓流、十和田湖を訪ねるといふ秋田県、岩手県、青森県に渡る盛りだくさんの内容の旅行であった。

2. 旅行参加者の属性

B施設の旅行参加者は、利用者27名で内4名は利用者の配偶者(男性12名:55～86歳,平均66.0±8.3歳,女性15名:33～82歳,平均67.7±14.1歳)とスタッフ3名(作業療法士1名,看護師2名)の計30名であった。利用者の既往症としては、脳梗塞、脳出血、心疾患、パーキンソン病、アルツハイマー病などであった。

学生ボランティアは、1年生3名(男性)、2年生3名(男性1名,女性2名)、3年生6名(男性・女性各3名)の計12名であった。

3. 旅行中のルール

3泊4日の旅行を実施する中で、学生ボランティアに対してB施設側より以下の4つのルールが決められた。

旅行参加者のうち、介助の必要な利用者が12名お

り、利用者1名に対して学生ボランティア1名が、旅行中終始担当すること

睡眠時間以外はほとんど担当者に帯同し、主に、車いすの移動、食事や入浴の介助を行うこと

その他、利用者の要望(例えば、カラオケ、買い物など)に対応すること

毎晩21:00～ミーティングをして、その日の反省会や明日の打合せ、情報交換などを行うこと

．アンケートについて

1. 調査方法

筆者が作成した質問紙を用いて、学生への支援と成果を検討する目的で、旅行終了後に学生へアンケート調査を行った。アンケートは、「参加する前の不安について」「事前の準備」「旅行に参加して経験や勉強できたこと」「困ったこと、戸惑ったこと」「旅行参加前後で変化したこと」「感想、大学への要望」「今後のボランティア参加について」の7項目について調査した。ほとんどの項目が自分の意見や感想を記載する自由記述式とした。

2. 倫理的配慮

学生には、研究の趣旨、個人が特定されることはないことを説明し、調査への協力は自由意志であり無記名とした。調査への回答をもって同意とみなした。

3. 分析方法

学生から得られた自由記述の回答を研究者2名で1回答1ラベルとしてカード化し、KJ法の手法¹⁾を参考に、カテゴリー化した。

．アンケート結果について

記述回答が得られた(1)～(7)の各質問について、大カテゴリーとサブカテゴリーの内容を表2～8に示した。

設問(1)「旅行ボランティアに参加する前は不安はありましたか?なかった方もあった方も、その理由を具

表1 旅行日程表

| | | みちのく大周遊! 田沢湖 小岩井農場 八幡平と奥入瀬渓流 十和田を訪ねて | | | |
|-----|--------|---|--|--|--|
| 1日目 | 9/5(土) | A空港・・・羽田空港・・・秋田空港・・・田沢湖(田沢湖散策) | | | |
| 2日目 | 9/6(日) | 小岩井農場・・・八幡平・・・八幡平アスピーテライン・・・発荷峠展望台・・・十和田湖温泉 | | | |
| 3日目 | 9/7(月) | 十和田湖遊覧・・・奥入瀬渓流散策・・・青森県観光物産館アスパム・・・青森市内 | | | |
| 4日目 | 9/8(火) | 八甲田ロープウェイ・・・ねぶたの里・・・青森空港・・・羽田空港・・・A空港 | | | |

体的に記入してください」は、全員が「不安はあった」と回答した。ラベルは合計16ラベル得られた。カテゴリー化の作業の結果見出された大カテゴリーは、[知識や実践経験不足のため、役に立てるのか自信がない][ボランティア内容や参加者の障がい状況が不明なため適切な対応が出来るか][参加者との関係構築]であった(表2)。

設問(2)「旅行ボランティアに参加する前に何か自分なりに準備をしたことはありましたか?」は合計10ラベル得られた。そして、[車いす操作方法や介助方法の復習][参加者にかかわる情報や車椅子の準備][旅行先の情報収集や持ち物の準備]という大カテゴリーを見出した(表3)。

設問(3)「旅行ボランティアに参加して、経験できたこと、勉強になったことはどんなことでしたか?」は合計26ラベル得られた。そして、[作業療法とは何か][日常生活の介助方法と工夫][障がい者とのコミュニケーションのとり方][社会人としての常識]という大カテゴリーを見出した(表4)。

設問(4)「旅行ボランティアに参加して、困ったことや戸惑ったことはどんなことでしたか?」は合計17ラベル得られた。そして、[様々な状況での介助方法][障がい者とのコミュニケーション][授業が実用的でない][予想外の出来事]という大カテゴリーを見出した(表5)。

設問(5)「何か変化したことはありますか?」は合計

表2 参加する前の不安について

| 大カテゴリー | サブカテゴリー | ラベル数 |
|------------------------------------|--------------------------------------|------|
| 知識や実践経験不足のため、役に立てるのか自信がない | 移乗や車椅子の操作方法, 長時間の車椅子介助など実践経験不足で自信がない | 3 |
| | 知識・勉強不足で自信がない | 2 |
| | ボランティア経験が少ないので、役に立てるのか | 3 |
| ボランティア内容や参加者の障がい状況が不明なため適切な対応が出来るか | ボランティアの役割や内容が不明 | 3 |
| | 参加者の障がい状況が不明 | 1 |
| | 適切な対応が出来るか | 1 |
| 参加者との関係構築 | 初対面で参加者と上手く関係が築けるか | 3 |

表3 事前準備について

| 大カテゴリー | サブカテゴリー | ラベル数 |
|-------------------|-----------------------|------|
| 車いす操作方法や介助方法の復習 | 車いす操作方法や介助方法を復習した | 3 |
| | 教科書を読んだ | 1 |
| 参加者にかかわる情報や車椅子の準備 | スケジュールや参加者の障がい状況の把握 | 2 |
| | 依頼された車いすの確保 | 1 |
| 旅行先の情報収集や持ち物の準備 | 旅行先の情報を調査したり下見に行ったりした | 2 |
| | 一般的な旅行の準備 | 1 |

表4 旅行に参加して経験や勉強できたこと

| 大カテゴリー | サブカテゴリー | ラベル数 |
|---------------------|---------------------------------|------|
| 作業療法とは何か | 作業療法の定義や可能性の大きさ | 3 |
| 日常生活の介助方法と工夫 | OTRの行動力や介助の際の工夫 | 5 |
| | 車いす操作方法や入浴介助方法, 食事介助方法 | 4 |
| | 失敗してもあきらめず, 柔軟な発想で挑戦したり, 工夫すること | 4 |
| | 限られた時間だけでなく, 一日を通してともに過ごすこと | 1 |
| | 車いす利用の方と行動を共にして介助をリアルに体験できた | 1 |
| 障がい者とのコミュニケーションのとり方 | 障がい者とのどのように接するか | 3 |
| | 対象者のやる気や意思を引き出すこと | 3 |
| | 障がい者も同じ人間だということ | 1 |
| 社会人としての常識 | 働く立場になったときに必要なこと | 1 |

16ラベル得られた。そして、[障がい者への接し方やイメージの変化][目指す作業療法士像][勉学への意欲]という大カテゴリーを見出した(表6)。

設問(6)「旅行ボランティアに参加してみて、全体的にどうだったか感想を記入してください。もし、問題点や課題、大学への要望などありましたら、記入してください。」は合計39ラベル得られた。そして、[よい経験が出来て有意義であった][何事も挑戦する作業療法士や参加者の姿に感動した][人と人との関係の大切さ][講義と現場との違いの経験][勉学への意欲][ボランティア活動の要望][社会人としての常識][ボラン

ティア数の要望]という大カテゴリーを見出した(表7)。

設問(7)「また、このような旅行ボランティアがあったら参加したいと思いますか？また、その理由を記入してください。」では、1名が自分に自信がないという理由で参加したくないと回答した以外は全員参加したいと回答した。ラベルは合計12ラベル得られた。そして、[学内実習では得られないことが経験できるから][利用者や作業療法士との旅行が楽しいから]という大カテゴリーを見出した(表8)。

表5 困ったこと、戸惑ったこと

| 大カテゴリー | サブカテゴリー | ラベル数 |
|-----------------|---|------|
| 様々な状況での介助方法 | 家族が同行していたり、頼られたりして、どこまで介助をしていいのかわからなかった | 4 |
| | 車いすの操作方法 | 3 |
| | 様々な状況への対処 | 1 |
| 障がい者とのコミュニケーション | 言語障害や知的障害の方などの接し方 | 6 |
| | 家族が同行している方との接し方 | 1 |
| 授業が実用的でない | 授業で学んだ知識が役に立たなかった(実用的でない) | 1 |
| 予想外の出来事 | NHKの取材班が同行していたことに驚いた | 1 |

表6 旅行参加前後で変化したこと

| 大カテゴリー | サブカテゴリー | ラベル数 |
|-------------------|----------------------------|------|
| 障がい者への接し方やイメージの変化 | 障がいを持つ方へのイメージや見方が変わった | 6 |
| | 利用者との接し方や接する時の気持ちが変わった | 2 |
| 目指すOT像 | OTRや先輩達の姿を見てOTに対する価値観が変わった | 2 |
| | 自分の目指すOT像や目指す先が定まった | 2 |
| 勉学への意欲 | 勉強への意欲や新学期からの大学の目標ができた | 2 |
| | 知識が増えたり、実践での学習のすばらしさ | 2 |

表7 感想、大学への要望

| 大カテゴリー | サブカテゴリー | ラベル数 |
|-----------------------|----------------------------------|------|
| よい経験が出来て有意義であった | 楽しく充実していて、参加してよかった | 8 |
| | いい経験が出来て、いい思い出となった | 2 |
| 何事も挑戦するOTRや参加者の姿に感動した | OTRや参加者のパワーに圧倒されたり、感動したりした | 5 |
| | 参加者が諦めずにいろんなことに挑戦する姿に感動 | 5 |
| 人と人との関係の大切さ | 人と人との関係の大切さや暖かさを感じた | 5 |
| | 利用者に対してどういう気持ちで接するのが適切かを学んだ | 1 |
| 講義と現場との違いの経験 | 病院実習や講義とは違う経験が出来た | 3 |
| | 知識はないが徐々に与えられた仕事をこなすことで多くのことを学んだ | 2 |
| 勉学への意欲 | 視野が広がり、もっと勉強して、今後に活かしたい | 4 |
| ボランティア活動の要望 | このようなボランティアへの参加の要望 | 2 |
| 社会人としての常識 | 働くことの大変さを痛感 | 1 |
| ボランティア人数の要望 | もっとボランティアの数が多くてもよかった | 1 |

表8 今後のボランティア活動参加について

| 大カテゴリー | サブカテゴリー | ラベル数 |
|-----------------------|------------------------------|------|
| 学内実習では得られないことが経験できるから | 病院実習や学校で学べないことを経験できるから | 4 |
| | 本当に楽しんで生き生きとしている姿を見ることが出来たから | 2 |
| | 実際に現場に立たないと分からないことが多いから | 1 |
| | もっと成長したいから | 1 |
| | OTR にまた会いたいから | 1 |
| 利用者や OTR との旅行が楽しいから | 利用者との旅行が楽しかったから | 3 |

考 察

1. 学生が旅行ボランティアに参加したことによる成果について

アンケート結果から、学生としては、充実感と達成感を得て、作業療法士としての関わり方や人間関係の構築の重要性、働くことの大変さ、何事もあきらめない姿勢を学び、さらには、早期からのこのようなボランティアへの積極的参加の要望があげられた。

アンケートの「旅行に参加して経験や勉強できたこと」のサブカテゴリーの「失敗してもあきらめず、柔軟な発想で挑戦したり、工夫すること」やアンケートの「旅行参加前後で変化したこと」のサブカテゴリーの「障がいを持つ方へのイメージや見方が変わった」「利用者との接し方や接する時の気持ちが変わった」という分析結果から、学内の授業やカリキュラム実習では、ある限定された時間の日常生活場面のみを観察・分析することが多い中で、今回は一日を通して障がい者と共に過ごした旅行だからこそ、一連の日常生活活動の中での障がい者自身の工夫や考え方および作業療法士等のスタッフの介助方法や工夫を体感することができ、障がい者とのコミュニケーションを含めて、障がい者に対するイメージや作業療法の仕事がどういふものかということの具体的な理解へとつながり、今後、作業療法士を目指す過程において非常に意味のあるボランティア活動であったと思われる。

2. 学生に対する本講座の支援と今後の課題

今回の旅行へボランティアとして本学学生が参加したことで、結果としては大変な経験もしたが参加して良かったという、学生からの高評価を得て、このようなボランティアの要請に応えた意義はあったと考えられる。しかし、本講座として、今後、このようなボランティアをどのように位置づけて捉えていくかが課題になるとと思われる。障がい者やスタッフとのやりとり

の中で、学生自身が、事前準備や対象者との関わり方、介助・支援の仕方をどのようにしていけばよいかという問題解決の方法を学んでいくことで、作業療法を理解してくことは非常に重要なことだが、アンケートの結果にもあったように、ボランティアの内容や参加者の障がい状況が不明なため適切な対応ができるか不安であったという意見から、学生へ紹介する段階で、事前にどのような趣旨のボランティアであるのかなどの情報収集をして、学生が困難な状況になると予測されることについては、あらかじめ指導をしたり、例えば、今回であれば、1・2年生は専門的な知識と技術をほとんど持ち合わせていないので、最低限車いすの操作方法を教えたりする支援も必要であったかと考えられる。

また、このようなボランティア活動を経験できる場や企画を意図的に組み込むことも必要なのではないかと考えられるが、ボランティアの理念・性質である「自主性」をどう捉えるか、ボランティア受け入れ先と大学がどのように連携して教育目標を共有することが必要であるかなどが議論されなければならないと思われる。

近年、ボランティアの社会的役割やボランティア学習における教育的意義が注目され、大学におけるボランティア活動支援の重要性が提唱されるようになっていく。文部科学省においても、学生ボランティアに対する奨励・支援に関する対策が講じられている²⁾。

さらに、ボランティア活動の「相互性」という性質から、学生への教育ニーズを満たすことに加えて、受け入れ先のニーズを考慮した教育方法や工夫も求められている。例えば、大学ボランティアセンターを設置して、開講授業として、地域貢献を重視したプログラムを立案・実施し、教育と地域貢献を有機的に結合させた画期的なプログラムを報告している大学もある^{注1)}。大学に課せられた「地域貢献」という観点からは、授業の一環として、ボランティア活動を行うことで、地域における社会的役割を知り、自主的・主体的に地域社会に貢献する心を涵養することの意義もある²⁾よう

だ。

本学では、教養教育の「人権と共生 ボランティア活動論」という授業科目は開講されているが、ボランティア活動を行うのではなく、ボランティア活動を通じて地域社会の課題に積極的に取り組める基礎を養成する目的のものである。また、サークル活動としては医学部公認のサークル「ボランティアネット」が存在し、障がい者（児）や盲導犬などの動物ボランティアと関わる活動を行っており、秋田県社会福祉協議会にも加盟している。部員全員がボランティア保険に登録されている。今後、アンケート結果にあったように学生からの積極的なボランティア参加の要望に対しては、現時点では、前述のボランティアネットの活動を学生に紹介することは可能であるが、今回要請があったような、障がい者と数日間を共に過ごすような学外ボランティア活動への参加についての支援は困難と思われる。しかし、例えば、社会福祉関連組織等や地域の施設等との連携をすることにより、施設側としては必要なボランティア内容や人数などの情報を、大学側としては参加可能な学生ボランティアの人数の情報を交換し、実際に学生がボランティアとして参加したり、参加することに伴う問題点などについての意見交換をすることで、施設等と大学との関係性が徐々に構築され、障がい者と数日間を共に過ごすような様々な内容のボランティア活動への参加が可能になるのではないと思われる。

結 論

障がい者旅行へ本学学生がボランティアとして同行し、講座として行った学生への支援とボランティアに参加したことによる成果を検討する目的で、旅行終了後に学生へアンケートを実施した結果、以下のことが示唆された。

- 1) 学生としては、一日を通して障がい者と共に過ごした旅行だからこそ、一連の日常生活活動の中での障がい者自身の工夫や考え方および作業療法士等のスタッフの介助方法や工夫を体感することができ、障がい者とのコミュニケーションを含めて、障がい者に対するイメージや作業療法の具体的な理解へとつながった。
- 2) 早期からのこのようなボランティアへの積極的参加の要望があげられた。
- 3) 本講座の支援としては、学生へ紹介する段階で、事前にボランティアの趣旨を情報収集して、学生が困難な状況になると予測されることについては、あらかじめ指導をする支援も必要であった。
- 4) 学外のボランティア活動への支援としては、学内のボランティアサークルを利用したり、社会福祉関連組織等や地域の施設等との連携を考えた検討が必要である。

注

- 1) 例えば、立命館大学では、「地域活性化ボランティア」という正規科目を設置し、ボランティアセンターの開講授業として実施されている。ボランティア先の現代GP「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」報告書（立命館ボランティアセンター2008年）

文 献

- 1) 川喜多二郎：発想法。東京，中央公論新社，2004，pp73-81
- 2) 藤田久美：大学における「ボランティア」の教育方法に関する一試論 山口県立大学「ボランティア」の授業実践から，山口県立大学学術情報第2号：133-151，2009

A Study of Student Volunteers Accompanying Handicapped People on a Trip

Megumi TSUGARUYA* Takashi ISHIKAWA* Keiichi TAKAHASHI*
Nachiko ISHII*

* Department of Occupational Therapy, Akita University Graduate School of Health Sciences

In response to a request from an occupational therapist at a B day service facility for student volunteers to join a trip organized for handicapped people to Akita, Aomori and Iwate, volunteers were recruited and 12 students accompanied the trip. The students contacted the institution directly.

A questionnaire survey was carried out on the students after the trip in order to examine the support provided by the students and the outcomes. The questionnaire investigated seven items: "concerns before participation" "prior preparations" "experience and learning outcomes" "things that caused trouble or confusion" "having changed" "impressions and requests for the university" "future volunteer participation".

As a result, the students evaluated having participated as a volunteer highly. For example, they received a sense of fulfillment and learned about the occupational therapy approach and the importance of developing human relationships.